長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要 第 12 号
令和 4(2022) 年 3 月

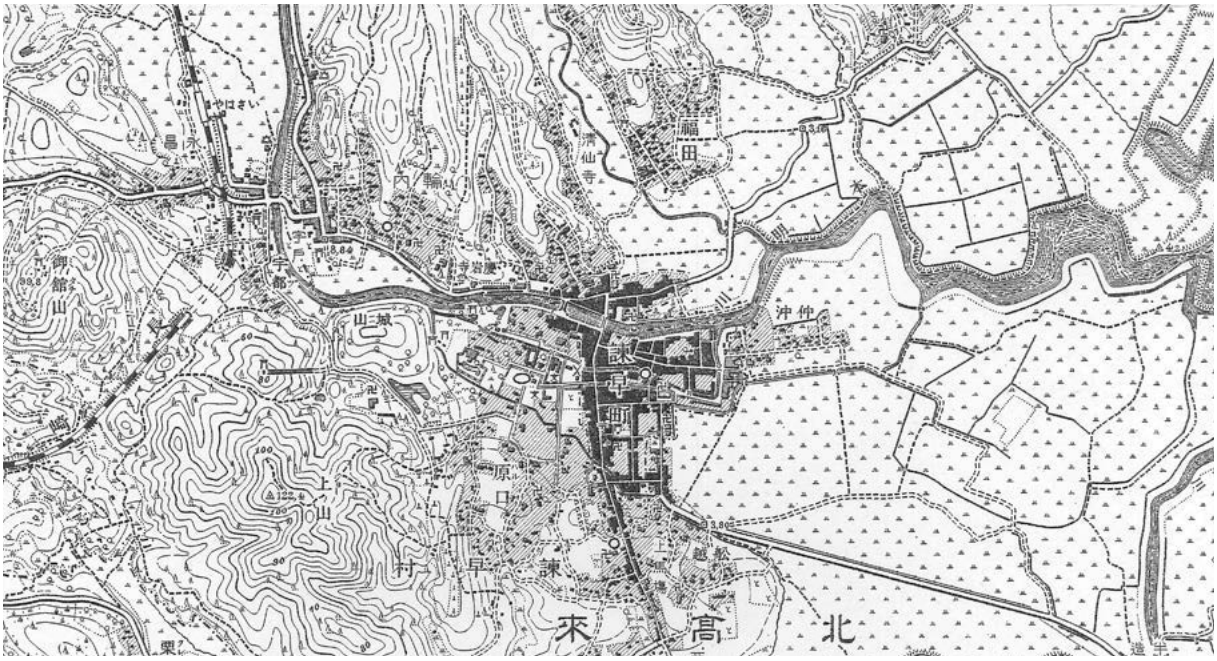
諫早市高城跡で採集された瓦について

諫早市政策振興部文化振興課
野澤　哲朗・新井　実和・福井　遥香

はじめに

１．高城跡について（第１図）

高城跡は長崎県諫早市高城町に所在する。戦国時代に西郷氏が築城した伝承があり、多良岳南麓から流れる本明川が東に流れを変える崖面から突き出た独立丘陵を利用した標高 50m の山城である。南側は細尾根、西側は谷を、北から東は本明川を堀として自然地形を利用した天然の要害である。明治以降に公園の園路として部分的に造成されているが、上段に東西に２段の平場と土塁、そして中段に平場が残り、西側に堀、南側に堀と土橋とが残る。朝鮮半島系中世瓦の採集報告事例がある。



第１図　高城跡の位置と地形図

２．採集地点について

今回紹介する瓦片の高城跡における採集地点は、高城跡の上段及び中段、南側の大堀で採集されたものに大きく分けられる。上段の採集地点は北側の斜面、中段の採集地点は南側の通路付近、南側の大堀の採集地点は堀の北側斜面裾となる。

高城跡は大正期に大規模な造成工事が行われ、現在のような公園の園路が形作られた。城の形態を大きく変更するような造成工事ではなかったと思われるが、瓦の散布はその変更箇所を物語るものと思われる。特に、中段南側の通路の路面には瓦溜が表面で観察できる。

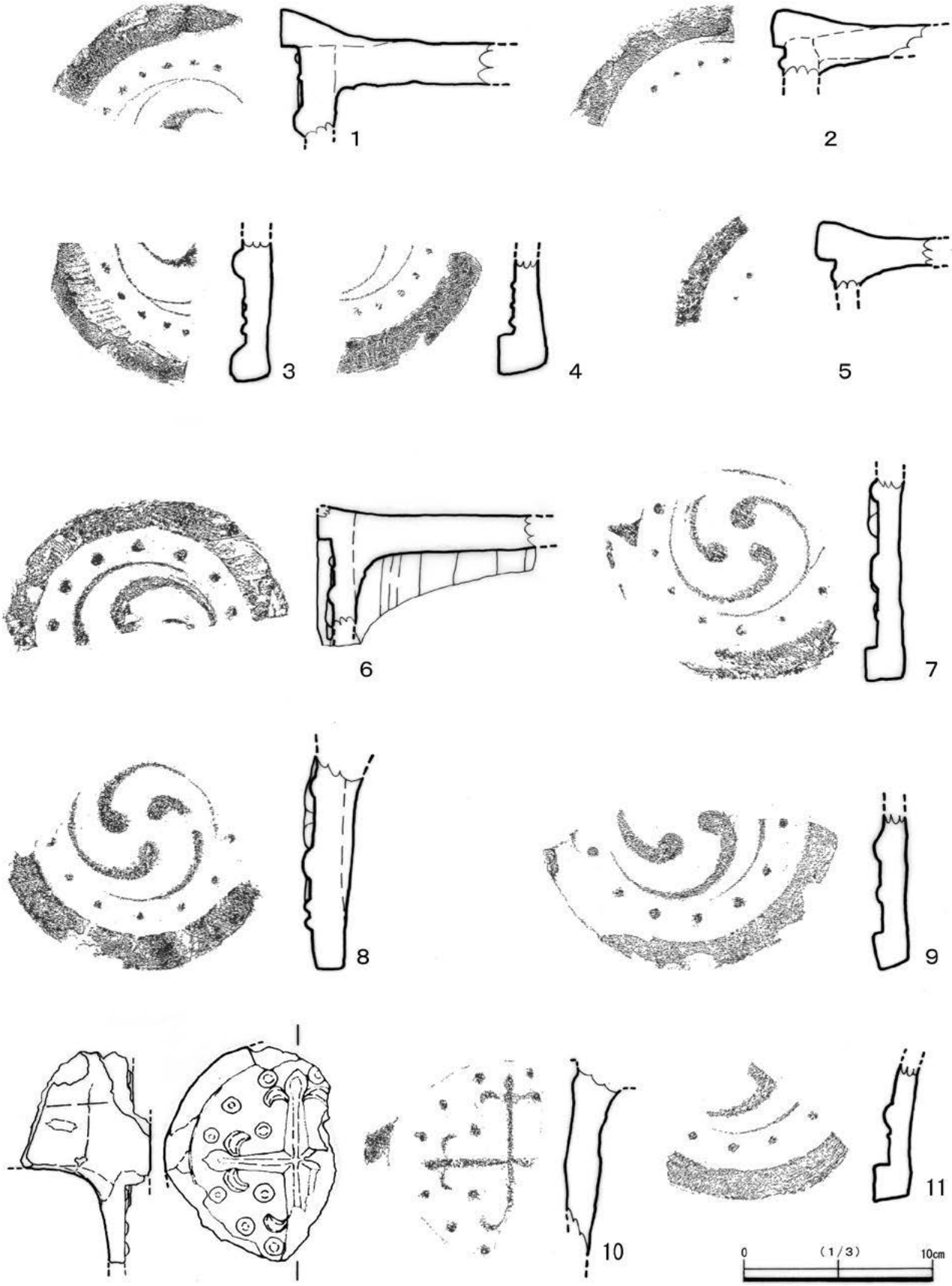
３．瓦の特徴（第２図・写真１～３）

採集された瓦は軒丸、軒平、丸瓦、平瓦の４種、文様や調整の違いにより以下のように分類できる。

- 軒丸瓦（**第２図**）の文様には、三つ巴文で圏線を持つものと持たないもの２種、そして圏線を持たない花十字紋、合計３種がある。
- 軒平瓦（**第３図**）は、中心飾りが上向き一葉、宝珠、三葉（単線と複線）、合計４種がある。
- 丸瓦は､内側の面取り調整が玉縁まで有るもの（**第４図**）と面取りがそれより狭いもの（**写真３**）との２種がある。
- 平瓦は、厚いもので調整が丁寧でヘラ切による面取り調整が多いものと薄いもので切り離しがコビキＢによるもので面取りなどの加工が殆どないもの、合計２種がある。

第２図１～５は軒丸瓦で、右巻きの三つ巴で圏線を持つ軒文様である。巴文の周囲にある珠文の間隔は非常に狭く 1.2 ～ 1.5 ㎝である。珠文の数は最大６点確認でき、復元すると 28 点前後となる。**１**は軒丸上半部で丸瓦部が残り、珠文６点、巴文は丸く高く、括れがあいまいで尾は急にすぼまる点が特徴である。珠文間隔 1.3 ～ 1.4 ㎝、縁幅 2.0 ㎝。丸瓦部の内面調整は布目があり、その上から比較的広い範囲でヘラ削りにより面取りされている。粘土板の切り離しはコビキＡで、接合は粘土円盤に半円筒にした粘土板を張り付け、外側から軒部分に粘土帯を巻き付けているため、軒端部が分厚い。焼成がやや不良で灰色、胎土には雲母粒子、白色・黒色粒子が入る。**２**は軒丸上半の周縁部の資料で､珠文４点である｡内部調整及び接合は**１**と同じである｡珠文間隔1.3～1.5㎝､縁幅1.8～2.0㎝｡焼成はやや不良で、白い茶色で、胎土はきめ細かく、白色粒子が入る。**３**は軒丸下半の資料で、珠文･圏線・巴が残る資料である。珠文５点、縁上面はカキ目状に接合痕跡が露出し、内面調整は丁寧なナデとなる。珠文間隔 1.2 ～ 1.5 ㎝、縁幅は上面 1.6 ㎝、基部は広い部分で 2.3 ㎝、断面の厚さは 1.4 ㎝と比較的薄い。焼成良好で濃い灰色、内部まで灰色、胎土には雲母及び黒色粒子が入る。**４**は軒丸下半の資料で、珠文は５点、内面のナデ調整が丹念に施されている。珠文間隔 1.2 ～ 1.5 ㎝、縁幅 2.2 ㎝、断面の厚さは中心近くが 1.3 ㎝、周縁部が 1.5 ㎝となる。焼成良好で濃い灰色、内部はやや白い、胎土は雲母粒子が少々入る。**５**は軒丸上半の周縁部の資料で、珠文２点で、内部調整及び接合は**１**と同じである。珠文間隔 1.3 ㎝、縁幅 2.0 ㎝。焼成はやや不良で胎土はきめ細かい。

第２図６～９･11 は軒丸瓦で、右巻の三つ巴で圏線がない軒文様である。珠文の間隔が広く、最大で７点あり復元すると 14 点前後となる。**６**は軒丸上半で丸瓦部のある資料で、内部調整には横方向の線がありコビキＢ（鉄線切り離し）による調整痕である。丸瓦部内面はナデ調整により接合痕跡を消している。断面観察により丸い粘土板に半円筒の粘土を載せて接合している。丸瓦部の断面は、**１～５**と比べると薄い。珠文間隔は 2.3 ㎝､縁幅 1.7 ㎝､断面の厚さは中心に近い部分で 1.2 ㎝である。焼成良好で濃い灰色、胎土には白色及び黒色粒子が入る。**７**と**８**は軒丸下半で巴文の全体が残る軒文様部分のみの資料である。**７**の三つ巴は鮮明で頭部が丸く断面は扁平で、括れ部分がはっきりしており、尾が細く長い。珠文は７点、間隔は 2.2 ～ 2.3 ㎝、縁幅 1.7 ～ 1.8 ㎝、断面の厚みは 1.1 ～ 1.3 ㎝と薄い。焼成良好、表面は茶～灰色、内面は灰色、胎土には雲母粒子、黒色粒子が入る。**８**の三つ巴は頭部が丸く断面も丸みを持っており、括れ部分がはっきりしており、尾は細く長い。珠文は７点、間隔は 2.2 ～ 2.3 ㎝、縁幅 1.8 ㎝、断面は厚みがあり 2.3 ㎝ほどある。焼成良好、表面青灰色、内

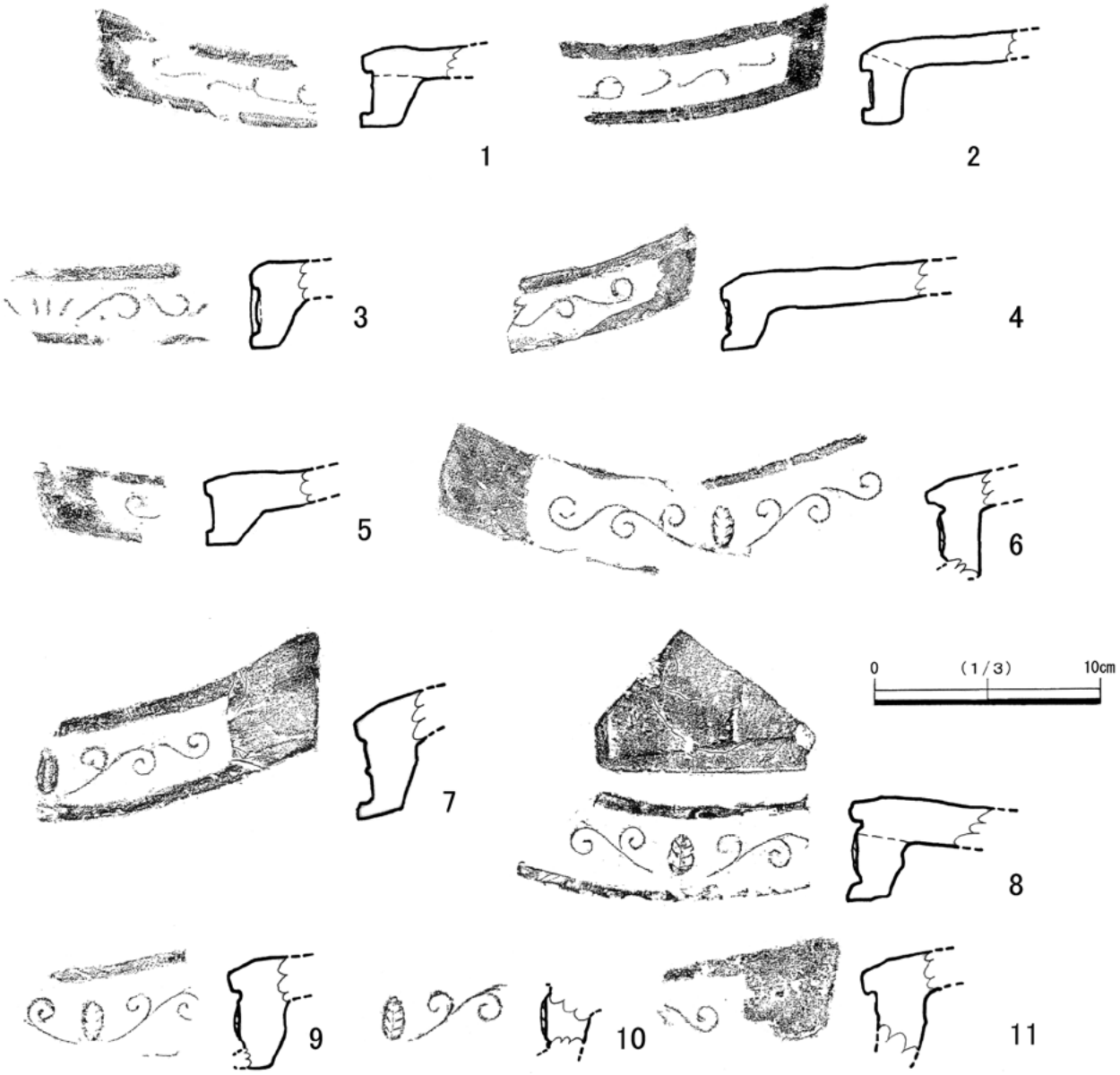


第２図　高城跡採集の軒丸瓦片（1/3）

写真１　高城跡採集の瓦片（軒丸瓦）

面白色から灰色、胎土には白色粒子、黒い長い長方形粒子、雲母粒子が入る。９は軒丸下半で巴文の３分の２が残る軒文様部分のみの資料である。巴は頭部が丸く断面も丸みをもち、括れも明確である。珠文は７点、間隔は2.7㎝、縁幅1.8㎝、断面の厚さは1.2～1.3㎝と薄い。焼成良好で、生地は白っぽい。雲母粒子かキラキラ粒が入る。11は軒丸下半の４分の１の資料で、珠文が４点、間隔は2.2～2.3㎝、縁幅は1.8㎝、断面の厚さは1.1㎝と薄い。巴は７・８・９とほぼ同じ形状である。焼成は良好、胎土は白色及び黒色粒子が入る。第２図10は花十字紋をもつ軒丸瓦で、軒丸部左半から丸瓦部までの資料で、割れ面は摩滅していない。珠文は７点、花十字紋の間に２点あり、縁部の珠文は復元で12点、花十字紋間の珠文は４点となる。珠文間隔は2.0～2.5㎝、縁幅は1.3㎝で、軒丸部の厚さは1.3～1.5㎝。花十字紋の断面は三角形で稜線はナデ調整により扁平となる。珠文の直径は１㎝前後と大きく、花十字紋は復元直径で9.8㎝となる。花十字紋の系統は、長崎市興善町遺跡出土品とほぼ同じである。

第３図１・２は中心飾りが宝珠で周辺飾りが不連続の３転唐草の軒文様をもつ。１は宝珠の左端と



第３図　高城跡採集の軒平瓦（1/3）

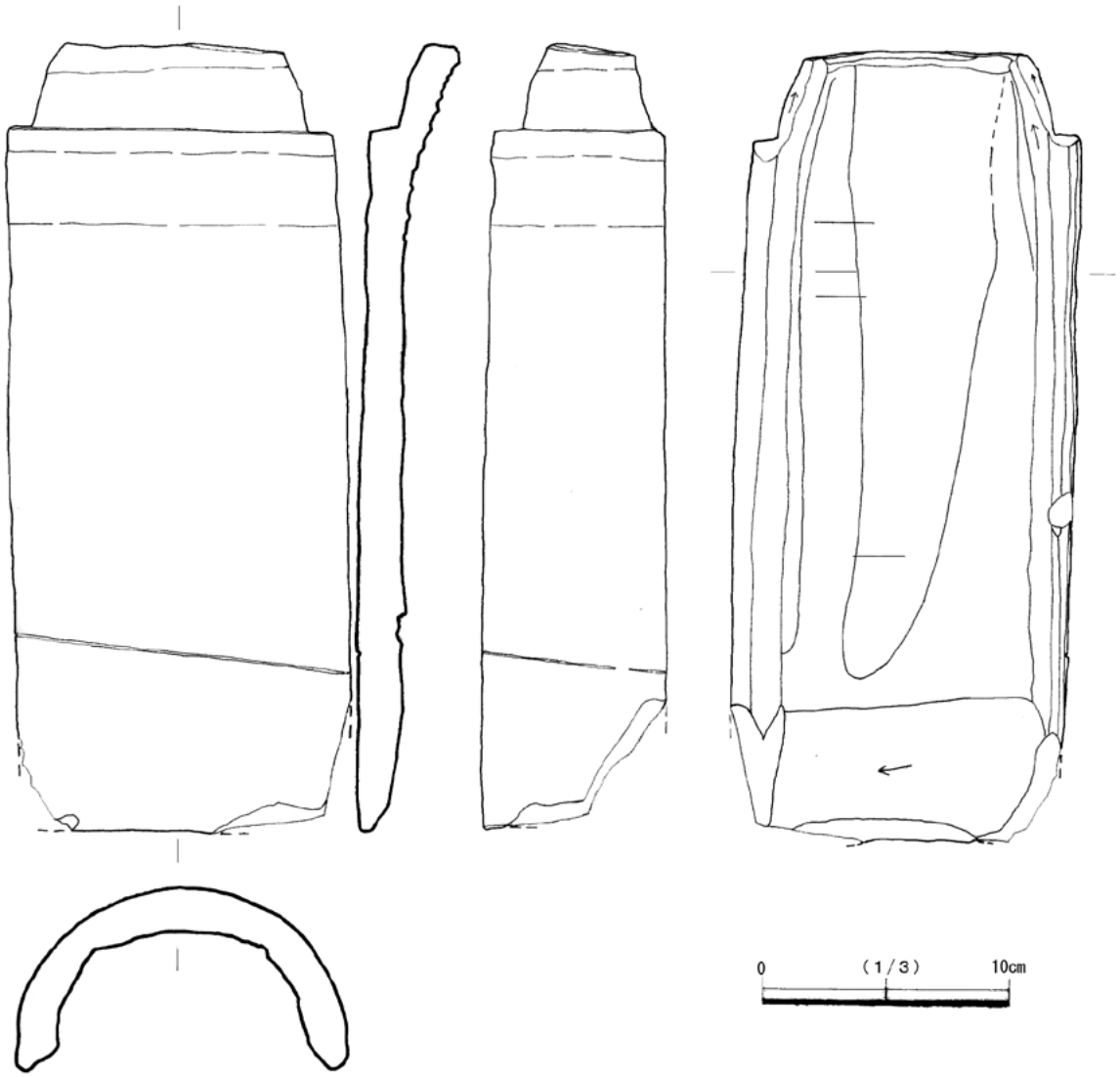
唐草３転で左端部までの資料である。顎部上面は面取調整があり、断面でも端部は斜めになる、接合は平瓦端部の下部に顎を接合し、顎断面は台形である。宝珠の高さは1.3㎝、文様帯の高さ1.7㎝である。焼成良好、色調は灰色、胎土は黒色及び白色粒子が入る。２は中心飾りの宝珠は完全な形で、右に不連続の唐草３転、左端部までの資料である。顎部上面は面取り調整があり、断面でも端部は斜めになる。接合は平瓦下部に斜めに顎を接合し、顎断面は方形である。宝珠の高さは1.2㎝、文様帯の高さは1.6㎝である。焼成はやや不良、色調は白っぽい灰色である。胎土には雲母粒子、黒く細い粒子が入る。３は中心飾りが陽刻の上向き三葉で、右に不連続の３転唐草の文様をもつ資料である。３点目は端部のみである。顎部上面は面取り調整があり、断面でも端部は斜めになる。顎断面は台形で、文様帯の高さは1.8㎝、焼成は良好であるがもろく、胎土には雲母粒子が入る。４は中心飾りが複線表現三葉文と思われ、右に連続の２転唐草となる文様である。唐草の巻は強く、６以降の上向き一葉の連続３転唐草に似る。文様帯の高さは1.6㎝、顎部上面の面取りは強く、断面でも端部は斜めになり、顎断面は台形である。焼成良好で硬く、胎土には雲母粒子が入る。５は左端の唐草の巻きのみの資料で、文様帯の高さは1.5㎝、４と同じ系統の文様とする。顎部上面に面取りがあり、端部断面もやや斜めで、顎断面は台形である。焼成良好で灰色、胎土には黒色及び白色粒子が入る。

６～11は上向き一葉の中心飾りで連続の３転唐草となる文様である。いずれも顎部上面の面取り

写真２　高城跡採集の瓦片（軒平瓦）

が広く、断面にも反映されており、８は拓本でも表現した。また、顎と平瓦の内側の角部内面を強く横ナデしており、ほとんどの断面で横ナデによる窪みが見られる。６は顎断面が方形であるが、７～11は断面台形である。中心飾りの一葉は高さ1.8㎝で、中心から左右に派生する３本の葉脈まで表現され、非常に特徴的である。文様帯の高さは2.5㎝前後あり、１～５の軒平瓦と比較して軒自体が広く大きい。唐草は一つ一つの巻が強く、中心飾りの下で左右の唐草の一転目が連続しており、非常に特徴的である。中心飾りからの巻端部の間隔は１転目が2.1～2.0㎝、２転目が4.2㎝、３転目が6.6～6.7㎝、５点ともほぼ同じ間隔で同笵関係が確認できる。６は２点の接合資料で、文様全体が判明する資料である。中心から左端までの文様帯の幅は8.3㎝、顎自体の高さは約５㎝、瓦の左端部までは12.6㎝、復元で全体幅は25.2㎝となる。１・２が中心飾りから瓦の端部まで10㎝ほどで高さが3.5㎝前後となるため、６～11の瓦は大振りの軒平瓦である。11は右端の唐草のみの破片であるが、唐草の巻きの状況などから同系統の軒平文様とする。焼成はいずれも良好で、硬質に仕上がっている。胎土には雲母粒子や黒色粒子を含んでいる。

第４図は全体が分かる丸瓦で、全長32.1㎝、幅13.5㎝、高さ7.5㎝で、焼成良好で色調は赤褐



第４図　高城跡採集の丸瓦（1/3）

色で瓦質というより陶質で、胎土はきめ細かい。外面は縦方向に丁寧なナデ調整があるが、玉縁付近は横方向に強いナデ調整が見られ、下半には一条の横線がある。内面は両端部を３面に分けて縦方向に長くヘラ削りにより面取りしており、玉縁内部も面取り調整が行われ、端部は広くヘラ削りにより面取りされる。粘土の切り取りは鉄線引きで横方向の線が複数確認され（コビキＡ）、その上に布目痕跡が残り、その上に縄目痕跡が全体に長くあり、上半部のみに幅７～８㎜、長さ３～４㎝の棒状の連続調整痕が縦方向に残る。この丸瓦の他に**写真３**にあるような外面に格子目叩き痕跡と特徴的な工具痕を残す丸瓦がある。

４．高城跡採集の瓦の分類

（１）採集された瓦の分類

本稿で紹介してきた瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦であり以下のように分類する。

軒丸瓦は圏線の有無と文様で次の３種に分類できる。

ＴＫＳ軒丸Ⅰ類：有圏線の左巻き巴文で珠文の間隔が狭いもの（**第２図１～５**）

ＴＫＳ軒丸Ⅱ類：無圏線の左巻き巴文で珠文の間隔が広いもの（**第２図６～９・11**）

ＴＫＳ軒丸Ⅲ類：無圏線の花十字紋（**第２図 10**）

軒平瓦については中心飾りで次の４種に分類できる。

ＴＫＳ軒平Ⅰ類：宝珠に不連続３転唐草（**第３図１～２**）

ＴＫＳ軒平Ⅱ類：上向き三葉に不連続の珠点付きの３転唐草（**第３図３**）

ＴＫＳ軒平Ⅲ類：複線表現の上向き三葉に連続２転唐草（**第３図４・５**）

ＴＫＳ軒平Ⅳ類：上向き一葉に連続３転唐草（**第３図６～ 11**）

丸瓦については厚みや調整により２種に分類できる。

ＴＫＳ丸Ⅰ類：玉縁端部内面にまで面取りがあるもの（**写真３上**）で、外面に格子目叩き痕跡や土師野尾窯跡出土品に類似するような形態的特徴や調整が確認できる。

ＴＫＳ丸Ⅱ類：丸瓦はコビキＢで玉縁端部内面に面取りが見られないもの（**第４図、写真３下**）

平瓦についても厚みや調整により２種に分類できる。

ＴＫＳ平Ⅰ類：厚く面取りが丁寧に施されるもの

ＴＫＳ平Ⅱ類：薄くて面取りなどが殆どないもの

（２）諫早市沖城跡出土の軒瓦との比較

諫早市内にある西郷氏築城と伝えられる沖城跡には、軒丸瓦に有圏線の左巻きと右巻き三つ巴文、無圏線の右巻き三つ巴文、上向き五花弁ともいうような花文、大きく３種の軒丸文様が確認されている。そして上向き三葉を中心飾りにもつ軒平瓦、蝶文を連続する軒平瓦、大きく２種が確認されている。特に上向き三葉に珠点付きの不連続３転唐草があり、伊藤敬太郎により長崎市万才町遺跡ＳＫ 128 出土品と同文であることが確認されている。沖城跡出土品の中でも有圏線の三つ巴の軒丸瓦と上向き三葉の軒平瓦については、伊藤編年のⅢ－２期（1600 ～ 1615）に位置づけられる。これらの成果と今回紹介資料を比較していく。

（２）－１　軒丸瓦について

ＴＫＳ軒丸Ⅰ類と類似する沖城跡出土の軒丸瓦には、圏線を持つ左巻き巴文（伊藤論文では尾部がつながり圏線状となると表現されるもの）がある。その中でも珠文の間隔が狭いものが、ＴＫＳ軒丸Ⅰ類と類似する文様である。しかし、ＴＫＳ軒丸Ⅰ類で紹介しているものは巴頭部分が不明であるため、沖城跡出土品のように巴頭部分が接するものであるかどうかについては、今後の調査による類例増加に期待したい。

ＴＫＳ軒丸Ⅱ類と類似する沖城跡出土品の軒丸瓦には、圏線を持たない左巻き巴文で珠文間隔が広い類例となる小破片があり、同文である可能性があるが小破片であるため比較できない。

ＴＫＳ軒丸Ⅲ類は無圏線の花十字紋瓦で、軒丸側面が残る破片である。現在のところ諫早市内には類例は存在しない市内唯一の事例である。ただし長崎県内には類例があり、宮下による分類では、Ⅱ（Ｃ３）類にあたり、長崎市興善町遺跡の出土軒丸瓦の花十字紋様に類似する。また、長崎奉行所出土品にも小片であるが、同じ紋様が確認されている。本稿では軒丸側面が残る立体的な破片であること、縁部分が残ること、花十字紋が半分近く欠けていること、意図的な打ち欠き痕跡が見られないことなどから、瓦とは別の用途に転用された二次加工資料ではないと判断する。同じように軒丸と側面の丸瓦部までの破片は高城跡の軒丸瓦にも確認されるため、高城跡では軒文様の一つとして花十字紋が採用されたと現段階では考えておく。

（２）－２　軒平瓦について

ＴＫＳ軒平Ⅰ類は宝珠に不連続３転唐草であり、沖城跡出土品には確認されていない。中心飾りが宝珠で連続する３転唐草は、南島原市の原城跡で確認されている。ただし、原城跡出土品は唐草と中心飾りが離れており、唐草端部の巻きが強いなど異なる点が多い。

ＴＫＳ軒平Ⅱ類は上向き三葉に不連続の珠点付きの３転唐草であり、沖城跡出土品にほぼ同笵となる資料が確認できる。このため、今後、高城跡採集品と沖城跡出土品、そして長崎市万才町遺跡ＳＫ128 出土品とを比較し、三者が同笵であるかどうかを確認する必要がある。同笵であることが確認された場合には、３遺跡に供給を行った瓦窯跡は同一箇所ということになるため、非常に重要な作業となる。

ＴＫＳ軒平Ⅲ類は複線の上向き三葉に連続２転唐草であり、沖城出土品には類似する文様の軒平瓦は確認されていない。

ＴＫＳ軒平Ⅳ類は上向き一葉に連続３転唐草であり、沖城跡出土品は既存の報告資料ではないが同笵となる資料（**写真５**の右上）が今回の報告作業中に確認された。高城跡の上向き一葉の軒平瓦は６点報告しているが、高城跡の軒平瓦で主体となる文様と考えられる。調整の特徴には軒上面の広い面取りがあること、顎の断面も台形となること、平部との接合には強い横ナデがされているなど非常に個性の強い資料である。上向き一葉の文様は県内では今のところ出土事例が確認されていないため、今後は竜造寺家の本所のある佐賀県域を含めた類例調査を行っていく必要があろう。

（３）土師野尾窯跡及び沖城跡の丸瓦との比較

丸瓦については、土師野尾窯跡の窯壁に利用されていた丸瓦片と類似する特徴をもつ。土師野尾窯跡で出土した丸瓦の特徴は、器壁が厚い・玉縁が短い・格子目叩き痕を残す・切り離し技法はコビキＡ・内側の面取りが丁寧で広い・玉縁内側の面取りも広いなどである。これらの特徴の他に、丸瓦の

表面玉縁付近に、棒状工具を３㎝ほど引きずった痕跡が残る個体が確認できる。この痕跡は高城跡の丸瓦で確認ができ、同じ痕跡は沖城跡出土の丸瓦にも確認できる。

土師野尾窯跡は 16 世紀後半の陶器窯で、中道窯とハタハラ窯の２基の陶器窯の存在が発掘調査で明らかになっている。年代的には中道窯跡の年代が 16 世紀後半代で、出土した陶磁器の形式学的編ではハタハラ窯跡も同じ年代である。科学的な年代測定の結果（熱ルミネッセンス）では、中道窯跡が 1570 年の前後 30 年の時期が想定されている。ハタハラ窯の構築財に利用された丸瓦もほぼ同じ年代の 16 世紀後半と考えられる。

同じく土師野尾窯跡の丸瓦に類似する丸瓦の出土が確認できるのが沖城跡である。沖城跡の丸瓦には２種あり、大きい作りで玉縁の内側に面取りを有するものと、小さい作りで玉縁の内側に面取りを持たないものとの２種がある。前者には格子目叩き痕跡が確認できる。後者は高城跡の陶器質の瓦（**第４図**の丸瓦）に類似する特徴であるが、高城跡のものが大きいという相違する部分もある。

５．おわりに

（１）上向き一葉の軒平瓦について

高城跡採集の瓦で特筆すべき点は、上向き一葉の文様である。この文様はこれまでの諫早市内の出土品には無かったもので、今回、紹介する事例が長崎県域でも初めての事例となる。また、この文様は沖城跡出土品にもみられるということは特筆すべき点である。沖城跡出土品の上向き一葉は高城跡採集品とほぼ同じものである。文様は高城跡の軒平瓦と比較すると、稜線が丸く、中心飾りの一葉も細部の稜線が丸くなっている。中心飾りの下から伸びる唐草が少しだけ短くなり途切れている点が特徴的である。このため高城跡と同笵であろうが､笵自体が劣化していることが想定できる。このため、両者には時間差を想定することも可能である。高城跡の上向き一葉文が先で、沖城跡の上向き一葉文が後出するという相対的な流れである。

（２）高城跡と沖城跡、土師野尾窯跡の瓦

高城跡採集の瓦を紹介し、市内に所在する沖城跡と土師野尾窯跡の出土品との比較を行ったが、３遺跡から発見された瓦片は強く関係していることが判明した。３遺跡に共通する点は、格子目叩き痕跡をもち丸瓦内面の面取り調整が共通する丸瓦があることである。高城跡と沖城跡に共通する点は、上向き一葉の軒平文様があること、上向き三葉の軒平文様があることである。

（３）今後の課題

諫早市内の３遺跡で確認された瓦の共通性は、本稿で紹介してきた考古学的な分析の成果の一つであり、今後は沖城跡と同文関係が指摘されている長崎市万才町遺跡のＳＫ 128 の上向き三葉で珠点付きの３転唐草の軒平瓦と高城跡採集との比較を行うことが必要となる。

高城跡で採集された瓦の年代の一端については、沖城跡出土瓦と同様の特徴をもつため 17 世紀初頭を前後する時期での位置づけは可能である。また、複数の軒文様を持ち、土師野尾窯跡に利用された瓦との類似性などもあり、それらの時期について今後もう少し詳細に検討していく必要がある。特に高城跡については、西郷氏の築城でその後に竜造寺家晴に政権交代するのは天正 15（1587）年であり、16 世紀第４四半期の年代をもつ土師野尾窯跡群で窯の構造材として利用された瓦との類似性などから、16 世紀代末までの年代を念頭に置いておく必要もあろう。西郷氏の瓦と竜造寺氏の瓦と

が存在する可能性が十分にあり得るのである。今後は、南島原市に所在する原城跡と日野江城跡で出土している瓦との比較作業を行い、高城跡の瓦の年代についてさらに検討していく必要がある。

また、丸瓦や平瓦についても諫早市内の３遺跡の出土品について大きさや調整の観察を行い、蛍光エックス線などの科学的分析による胎土観察も駆使しながら、瓦生産や流通に関する考察等が今後行われることが期待される。

参考文献

論文・資料紹介

伊藤敬太郎 2003「近世長崎の瓦―そのはじまりについて―」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

伊藤敬太郎 2017「近世長崎の瓦について」第 66 回埋蔵文化財研究集会『幕藩体制下の瓦―近世都市遺跡における生産と流通―』

木島孝之 2001『城郭の縄張り構造と大名権力』(財)九州大学出版会

後藤宏爾 1996「名護屋城跡出土の軒平瓦」『研究紀要第２集』 佐賀県立名護屋城跡博物館

橋本幸男 1992「長崎県諫早市・大村市出土の朝鮮半島系中世瓦について」『古文化談叢第 27 集』 古文化研究会

宮﨑博司 1997「名護屋城跡出土の軒丸瓦」『研究紀要第３集』 佐賀県立名護屋城跡博物館

宮下雅史 2003「花十字紋瓦考」『西海考古第５号』西海考古同人会

宮下雅史 2010「長崎地方のキリシタン瓦」考古学ジャーナル 600『特集日本のキリシタン考古学』

宮下雅史 2018「花十字紋瓦の二次加工と転用について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第８号』 長崎県埋蔵文化財センター

山﨑信二 2008「第 6 章近世長崎の瓦」『近世瓦の研究』同成社（東京）

遺跡調査報告書

扇浦正義編 1998『興善町遺跡―日本団体生命保険長崎ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』 長崎市教育委員会

扇浦正義編 2003『勝山町遺跡―長崎市桜町小学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』長崎市教育委員会

高野晋司編 1998『沖城跡―諫早南部５期地区農免農道整備に伴う緊急発掘調査報告―』長崎県文化財調査報告書第 143 集 長崎県教育委員会

川瀬雄一・秀島貞康・古賀力編 2000『沖城跡―市道田井原南北線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』諫早市文化財調査報告書第 14 集 諫早市教育委員会

川瀬雄一編 2005『沖城跡Ⅱ―市道田井原南北線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』諫早市文化財調査報告書第 18 集 諫早市教育委員会

図版出典

第１図　明治 35 年　大日本帝国陸地測量部　２万分の一より作成

第２～４図　実測・拓本：新井文化財専門員・福井文化財専門員（市文化振興課）

花十字紋瓦：実測　前田文化財保護主事（長崎県埋蔵文化財センター）・野澤

製図：新井文化財専門員

写真１～５　撮影：野澤、江口専門員（諫早市美術・歴史館）、福井文化財専門員（市文化振興課）

写真３　高城跡採集丸瓦

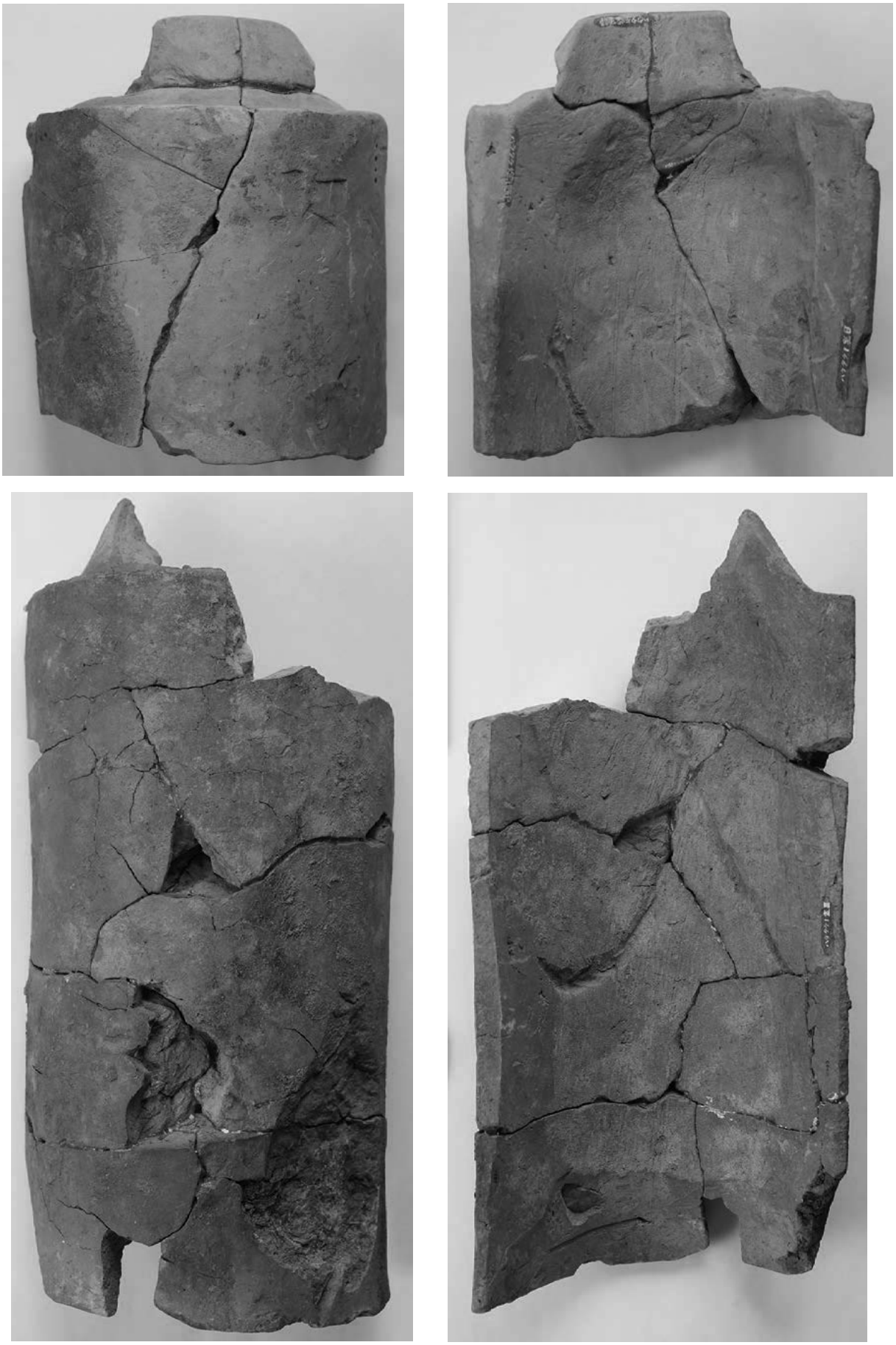


写真４　土師野尾窯跡出土の丸瓦

写真５　沖城跡出土の丸瓦